



書道研究誌

書の光

9
2023

Vol.661
宮城野書道会

飲酒二十首 其七 陶淵明

秋 菊 有 佳 色
衰 露 掇 其 英
汎 此 忘 憂 物
遠 我 遺 世 情
一 觴 雖 獨 進
杯 盡 壺 自 傾
日 入 群 動 息
歸 鳥 趨 林 鳴
嘯 傲 東 軒 下
聊 復 得 此 生

秋菊 佳色あり

露を掇れたる其の英を掇み

此の忘憂の物に汎べて

我が世を遺るるの情を遠くす

一觴独り進むと雖ども

杯尽きて壺自ら傾く

日入りて群動息み

歸鳥林に趨いて鳴く

嘯傲す東軒の下

聊か復た此の生を得たり

秋の菊が美しい色で咲いている。露に濡れたその花びらをつみ、

この「忘憂の物」である酒に浮かべて飲むと、俗世間から遠ざかった私の気持ちをさらに深めるのである。

一杯、一杯とひとりで飲んでみると、酒も残り少なくなり、酒壺も自然に傾いてくる。

日が落ちて昼の多くの物音も止み、鳥は林に向かって鳴きながら飛んで行く。

東の軒の下でうそぶく時、今日も心のままに生きたのだと思うのである。

《衰》ぬれる、うるおう。

《掇》つみとる。

《忘憂物》酒をいう。

《一觴》一杯。

《壺自傾》残り少なくなり傾くこと。

《嘯傲》うそぶきおこる。

《聊》ますます。

《得此生》今日また生きたということ。

東晋時代の陶淵明は唐の李白・杜甫以前の代表的な詩人です。「田園詩人」と呼ばれて隠遁生活を詠んだ詩や酒を主題とした詩を詠んだことで有名です。この詩は陶淵明の「飲酒」と題する二十首のなかの第七首です。「飲酒二十首」は、酒を飲んだ折々の心をおもむくままに詠んだ詩をのちに友人に託してまとめたもので、一時期の詩ではありません。その内容も酒ばかりがテーマではなく多岐に亘っています。

陶淵明は、四十一歳の時に役人生活に区切りをつけて故郷の農村に帰り、隠居生活を始めました。隠居生活と言うと何も憂いのない悠々自適な生活を送ったように思いがちですが、決してそうではありません。陶淵明は酒を飲むことによってしか寛ぐことのできない心の蟠りのようなものを抱えて農村での生活をしていました。

石川啄木二十二歳の日記には、「——嗚呼、淵明の飲みし所の酒、其の味は遂に苦かりしならん焉。酒に酔うは苦き味に酔う也。……(前後略)」として、懊悩している陶淵明の姿を詩から読み取っています。

この詩に登場する酒の異名「忘憂の物」は陶淵明の造語で、後世でも使われています。

酒はまさに憂いを忘れさせるものであり、啄木が言うように陶淵明が飲んだその味は苦かったのでしょう。

詩の冒頭に登場する菊は、中国では昔から観賞用だけではなく、食用にも供されています。五節句の一つの九月九日の「重陽の節句」は「菊の節句」とも呼ばれ、長寿を願う酒に菊の花びらを浮かべて飲む風習は古くからあります。

陶淵明は酒に菊の花びらを浮かべて盃を重ねます。夕暮れとなり鳥や動物たちもねぐらに帰ります。田園での安らぎのひととき、思わず歌を口ずさみます。そして最後に「聊か復た此の生を得たり」と自分の来た道が正しかったことに充足感を覚えます。

この詩は、陶淵明の隠棲の内実を根底に、田園の自然を絡めて深く豊かな味わいがあります。

早蛩啼いて復た歇む 残燈滅して又た明るし 窓を隔てて夜雨を知る 芭蕉先ず聲有り

早蛩啼復歇
殘燈滅又明
隔窓知夜雨
芭蕉先有聲

《大意》コオロギが鳴いたと思うと鳴きやみ、ともし火が消えたかと思うと明るくなる。眠られずに、物思いにふける。すると、窓の外に、夜の雨が降り注ぐ。芭蕉の葉に先ず音が聞こえた。(白居易詩・夜雨)

往事飛鴻の外 浮生蝶夢の中

往事飛鴻外 往事飛鴻外
浮生蝶夢中 浮生蝶夢中

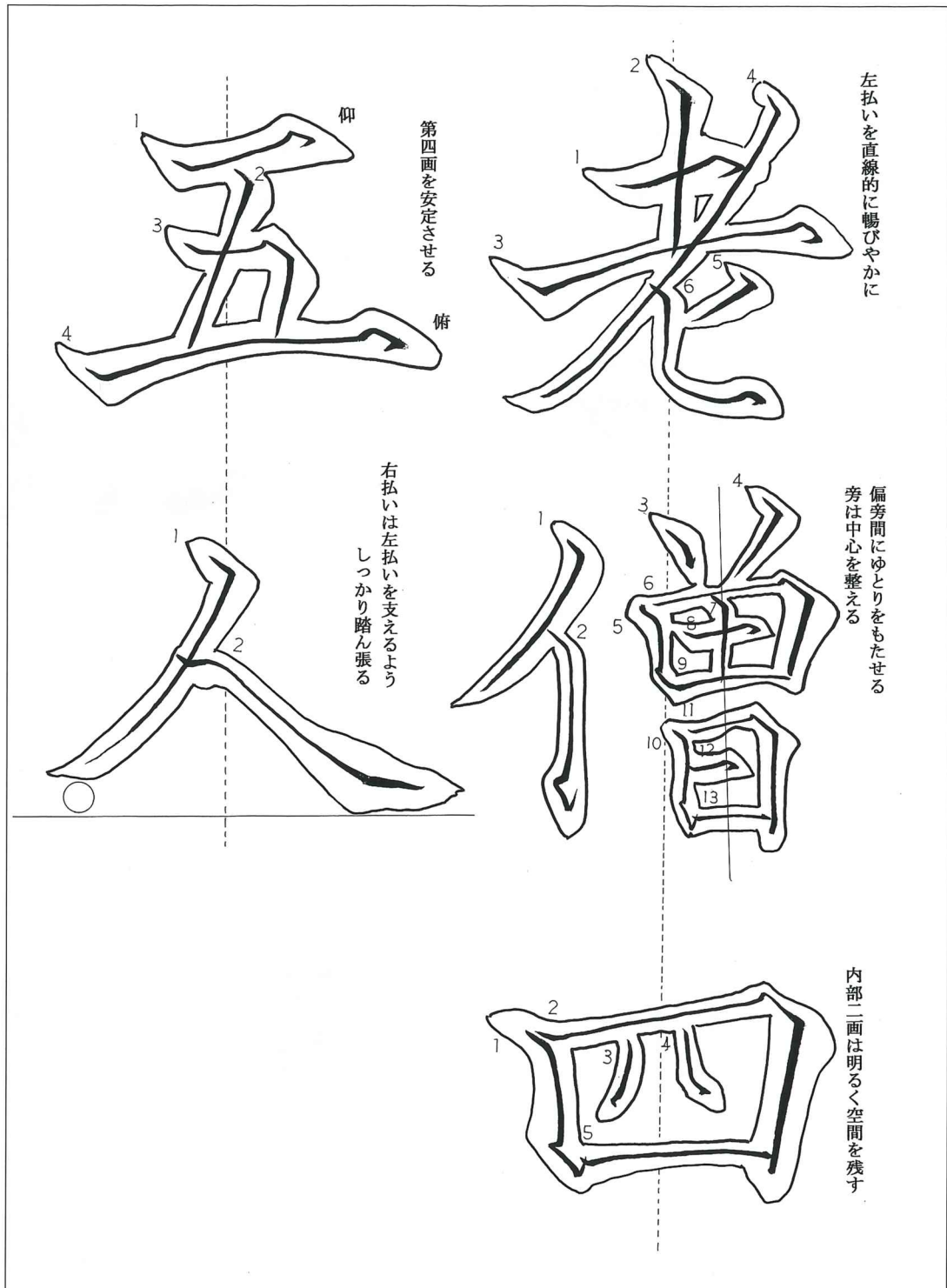
《大意》過ぎ去った昔のことは飛鴻の外で跡もない。このはかなき人生は蝶に化した一夢の中にある。

(顧清句) ※蝶夢は荘子の故事

読み
老僧
四五人
(老僧が四、五人)

老僧
五人
四

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について
 ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(前半)

落日山水好

落日 山水好し

漾舟信歸風

舟を漾わせて 歸風に信す

玩奇不覺遠

奇を玩んで遠きを覺えず

因以緣源窮

因りて以て源を縁ねて窮む

遙愛雲木秀

遙かに雲木の秀でたるを愛し

初疑路不同

初めは路の同じからざるかと疑う

安知清流轉

安んぞ知らん 清流轉じて

偶與前山通

偶々前山と通ずるを

捨舟理輕策

舟を捨てて輕策を理む

果然愜所適

果然として適する所に愜う

老僧四五人

老僧 四五人

逍遙蔭松柏

逍遙して松柏に蔭う

(後半に続く)

草書

行書

五人僧四

五人僧四

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

松道
柏遥蔭

五人僧四

逍遥して松柏いごに蔭う

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
野分の夜					
書読む心定まらず					

正岡子規

和泉溪石先生書

牋牋簡要願答審詳
 牋牋簡要願答審詳
 抄抄普要願答審詳

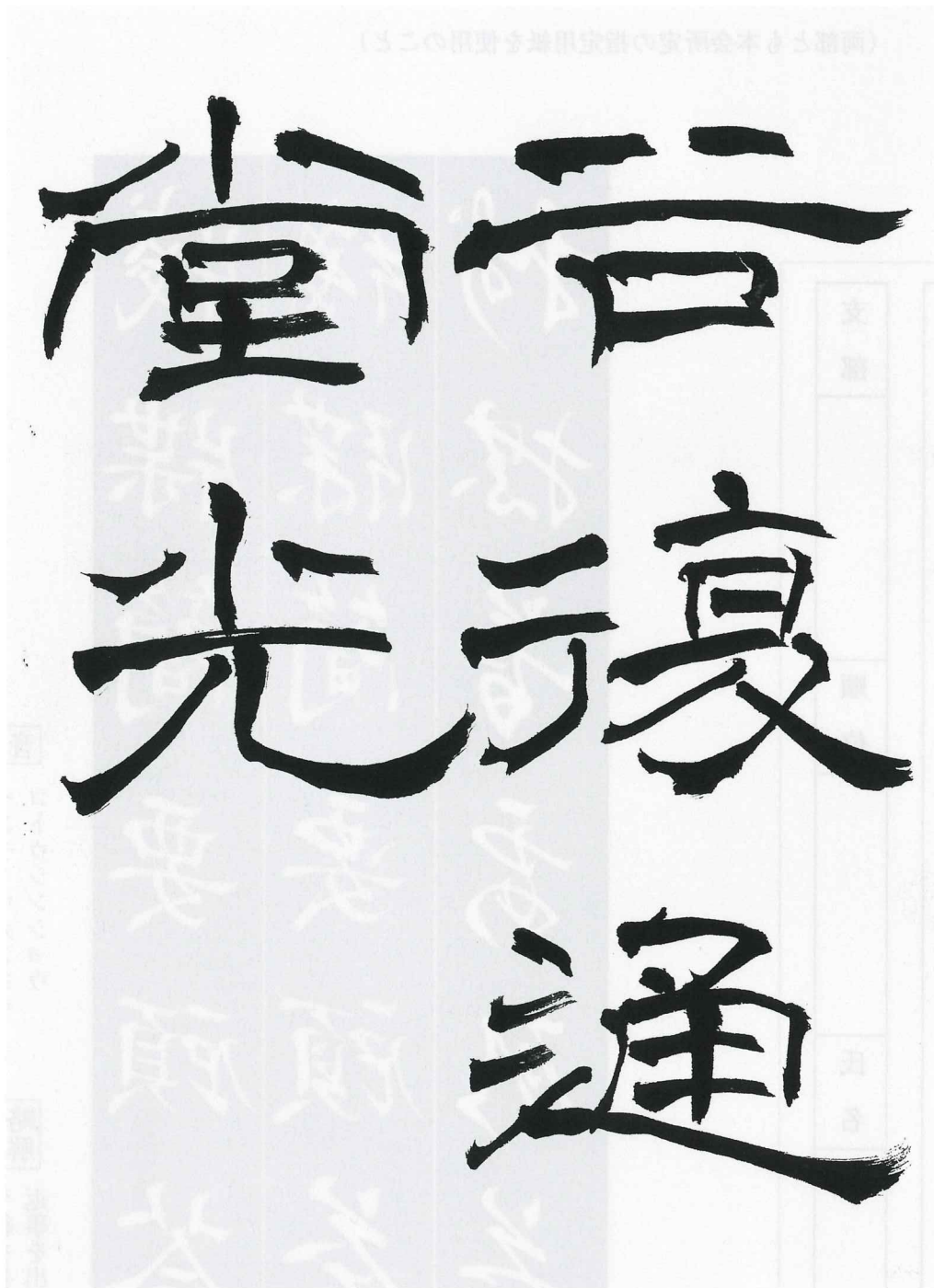
佐藤象雲書

音

センチヨウカンヨウ
コトウシンシヨウ

略解

手紙を書く時は肝心なことを手短に
返事を出すには、詳しく相手によくわかるように



谷復通堂光……

象雲臨

■ せきもんしょう石門頌 (後漢・西曆一四八年) の臨書 (9)

『谷復通堂光』

石門頌は漢隸であり、八分隸に分類されますが、概念的な書法ではなく様式的な価値よりも摩崖碑として独特の風趣を存しています。宋時代の著録にその存在が見えますが、注目を集めるようになったのは清時代の乾隆年間です。清の学者王昶は石門頌を評して「書體勁挺にして姿致あり、開通褒斜道摩崖の隸字と疎密齊しからざるもの。各々深趣を具ふ。推して東漢人の傑作と為す。」と称揚しています。八分隸は波磔の処理によってややもすると俗気が出易い書体ですが、この石門頌の波磔は控えめで、最大の特徴は摩崖碑特有の古趣に富むことです。

今月は「谷復通堂光」の五文字を臨書します。幅広く字中にゆとりがあります。各字波磔を持っていますが軽快です。線を太くして波磔を強調すると本来の風趣から乖離します。

松風水月

松風水月

象雲臨

■王羲之・集字聖教序(唐・西暦六七二年)の臨書 (23)

松風水月

『松風水月』

唐の僧懷仁の二十年以上にわたる王羲之の集字作業を称して「集字の辛苦は書丹に倍せり」という言葉があります。昔の碑は撰文する人と、書丹する人が必ずいました。碑文を作る人とそれを朱で碑面に書く人です。そしてそれを石工が刀で刻していきます。

懷仁は宮中にあった王羲之の真蹟を蠟紙に模写し、それを縮尺拡大などの作業を加えて細い線で一点一画の周囲を縁取りし、それを石の上に張り付けていきます。該当する王羲之の字がない場合は、偏旁を組み替えたりして苦心の跡が窺えます。王羲之の書は楷書から草書まで様々で、書かれた年代もそれぞれですので、二十一年に亘ったその労苦は並大抵のものではなかったでしょう。

しかし、文字間の統一性や気脈の一貫性はなく、碑の評価は決して高くはなく飽く迄王羲之の幻影であり、肉筆を超える存在には成り得ません。

唐時代はそれまで主流だった楷書碑と隸書碑に加えて太宗の晋祠銘を始めとして行書碑が登場しました。その後に李邕の「李思訓碑」などの名碑などが誕生しましたが、行書碑は、碑字の主流にはなりませんでした。

今月の「松風水月」は例に漏れず文字の大小が不自然です。